

構文継承と構文獲得

Inheritance Links and Acquisition of Construction

本多 明子[†]

Akiko Honda

[†]至学館大学

Shigakkan University

honda@sgk.ac.jp

Abstract

This paper aims to show the inheritance links model of constructions in terms of language acquisition. The idea of inheritance links comes from Construction Grammar theory (Goldberg 1995, 2006) and it captures the relation between semantically and syntactically related two constructions. In this paper, we will discuss how young children acquire English verb-particle constructions. Based on the corpus of the Child Language Data Exchange System (CHILDES) established by MacWhinney (1984), I present the model by examining the acquisition process of the construction in question. This paper shows that they acquire the verb-particle construction as an inheritance from the caused-motion construction in English.

Keywords — **Inheritance Link, Verb-Particle Constructions, Caused-Motion Constructions, Language Acquisition**

1. はじめに

本論文の目的は、認知言語学の用法基盤理論、構文文法論 (Construction Grammar) の考えの一つである構文間の「継承リンク (Inheritance Link)」について、言語獲得の側面から構文の継承モデルを示すことである。構文文法とは、構文という伝統的な概念を文法における基本単位とし、構文は各々独自の意味と形式から成り、言語は構文の集合であるとの考えに基づく (cf. Goldberg, 1995, 2006)。本論文で取り上げる構文は英語の動詞不変化詞構文 (Verb-Particle Construction) である。当該構文は、こどもの発話データベースである CHILDES を調べてみても、さらには、英語を母語とするこどもたちの日常会話を観察しても、こどもの使用頻度は高く、発達の初期段階から様々な発話場面で使用されている (拙論, 2017)。本論文では CHILDES の言語資料をもとに、こどもがどのような構文を使用しながら英語の動詞不変化詞構文を獲得していくのかその過程を考察することを通して上記モデルを提示する。ここでは英語を母語とする Lara (女の子) の言語資料をもとに論じる。

本論文の結論は次の通りである。即ち、動詞不変化

詞構文は因果関係を記号化する構文であり (拙論2004)、当該構文の獲得過程を見てみると、因果関係の中でも位置変化を表す使役移動構文 (Caused-Motion Construction) と継承関係にある。

2. 動詞・不変化詞構文の獲得過程

言語資料の CHILDES から不変化詞を伴う発話を抽出すると、こどもが動詞不変化詞構文を発話するようになるまでには幾つかの構文獲得過程を経ていることが確かめられる。不変化詞を伴う表現として最初に観察されるのが(1)のような発話である。尚、ここでは紙面の都合上、こどもの発話のみ記載する場合があるが、其々の発話は親や祖父母との会話の中で話されたものである。また、本稿では CHILDES に従い表記するため、文頭の文字の大きさやその他表記方法等原文の通りである。

- (1) a. bye bye away. (Lara 1; 10)
b. get out. (Lara 1; 11)

(1a)はLaraが1歳10ヶ月の時に、(1b)は1歳11ヶ月の時に発話したものである。Lara以外のこどもの言語資料を調べてみても、この頃の発話では、(1a)のように不変化詞が単独で用いられたり、(1b)のように動詞と不変化詞を組み合わせた形式が多くみられる。意味の側面では、1歳頃に発話される不変化詞は方向や場所を示している。不変化詞は、先行研究において指摘されているように、方向や場所だけでなく結果の意味を表し (cf. Visser (1963), Tenny (1994), Bolinger (1971)), 結果の意味については、後でも見るように2歳を過ぎた頃から観察される (put the telly on (Lara 2; 02-04 (2歳2ヶ月4日を示す)))。

次の段階では、こどもは不変化詞に具体的な場所を示す名詞 (句) を後置させた形式を用いるようになる。例えば(2)のような発話である。

(2) get foot off table. (Lara 2; 01-11)

(2)では、動詞getの後ろに目的語footが、不変化詞offの後に具体的な場所を示す名詞tableが置かれている。主語 (SUBJ) や冠詞がないものの、形式的には動詞 (V) と目的語 (OBJ) , 方向を示す表現の前置詞句 (OBL) があるため、使役移動構文 ([SUBJ [V OBJ OBL]]) (Goldberg 1995, 2006) である。当該構文の基本的な意味は、‘X CAUSES Y to MOVE Z’ (ibid.) で表記されるように、目的語名詞句の位置変化を表すことである。2歳頃になると具体的な物の場所の変化 (移動) について認識し、それを使役移動構文により言語化することができるようになる。

さらに、時系列で見てみると、次の段階で観察されるのが(3)のような発話である。

- (3) a. take bib off. (Lara 2; 01-16)
 b. daddy put it in the cooker. (Lara 2; 01-21)
 c. have to put shoe on. (Lara 2; 01-25)

(3a)はいわゆる動詞不変化詞構文である。但し、(3a)に見るように、この時期においては主語が記号化されおらず、構文としては未完段階である。ここでの注目点は、ある具体的なものの位置変化が自らの身体部位と関わる移動の場合には、動詞不変化詞構文が用いられているということである。(3b)に見るように、自らの身体部位以外の場所と関わる位置変化の場合には、こどもは、場所を言語化し使役移動構文を使っている。(3c)は(3a)と同様に、自らの身体部位と関わる位置変化を表しているため動詞不変化詞構文が用いられている。それ以降においても、同様の結果が得られる。

- (4) a. I want to put his t-shirt on. (Lara 2; 05-08)
 b. shall I put it on fire place? (Lara 2; 05-25)

(4a)を構文文法の表記法を用いて表すと、その形式は [SUBJ V OBJ P] (P: Particle (不変化詞)) となる。(4a)と(4b)を比較すると、自らの身体部位に関しては、不変化詞の目的語として記号化されないという特徴がある。

自分以外の他者の身体部位が関わってくる位置の変化 (移動) については、自らの身体部位を動詞・不変化詞構文を用いて発話するようになって後に観察される。

- (5) CHI: can I take this off? (Lara 2; 07-07)
 MOT: no.
 MOT: that's my wedding ring.
 CHI: I want it.
 MOT: you can't have it.
 CHI: I want it on my finger.

(5)は、Laraの母親が指にしている結婚指輪をLara自身が自分の指につけたくて、母親の指から指輪を外してよいかと尋ねている場面である。Laraの発話を見ると、母親の指は不変化詞offの目的語として言語化されていない。同様のことが次の(6)と(7)の会話においても観察される。

- (6) CHI: take your nappy off, Rosie. (Lara 2; 07-27)
 CHI: it's morning now.
 (7) DAD: oh, Lara.
 DAD; be careful.
 DAD: that's it.
 CHI: have to take your clothes off.
 DAD: I know.
 DAD: well.
 DAD: to go in the bath? (Lara 2; 08-10)

(6)ではLaraが妹のRosieに、(7)では父親に対して、身に着けている物を其々の身体部位から取るように伝えていく。自らの身体部位と関係する移動だけでなく、他者の身体部位と関わる移動に関しても、使役移動構文ではなく、動詞・不変化構文により発話される。

具体的な物の位置変化を表す動詞不変化詞構文を獲得した後に観察されるのが、(8)である。

- (8) a. shall I put the light off? (Lara 2; 06-22)
 b. I turn that light off? (Lara 2; 06-22)

この段階になると、こどもは動詞不変化詞構文を使って目的語名詞句 ((8a)と(8b)であればthe light) によって表される具体的なものの状態変化を表すことができる。具体的な物の位置変化 (移動) から結果を意味する状態の変化へと、動詞・不変化詞構文で表すことのできる事象の幅が広がることが確認できる。また、物理的な移動を表す場合、自己または他者の身体部位と関わ

る移動については、動詞・不変化詞構文で言語化される一方、事象に関係する具体的な場所が指定される場合には、使役移動構文で表されるが、同じ変化でも、ものの状態変化（結果）を表す場合には、動詞・不変化詞構文により記号化される。

次節では、2節での考察結果から、どのように、こどもは動詞・不変化詞構文を獲得するに至るのか、構文文法論における構文間の継承リンクの観点から提示する。

3. 継承モデル

構文間の関係を捉える継承リンクという考えは、Goldberg (1995) により提案されたものである。下図1で示すように、異なる構文間に動機づけの関係 (relations of motivation) が見られる場合、継承という考えにより、それらの構文の結び付きを意味的、形式的に説明することができる。

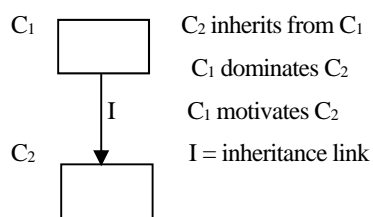


図1

(Goldberg 1995: 73)

構文の継承について、動詞・不変化詞構文の獲得に至る過程を見てみると、1歳頃の発話では、先に述べたように、不変化詞のみまたは動詞と不変化詞を組み合わせた形が多く見られ、2歳頃になると、具体的な物の場所移動について言語化する際には、いわゆる使役移動構文が発話の中に現れる。その後、物の移動に関して、身体部位と関わる場合には、こどもは動詞・不変化詞構文を選択する。当該二つの構文の獲得過程を踏まえると、図2に示すように、動詞・不変化詞構文は使役移動構文によって動機付けられていると考えられる。

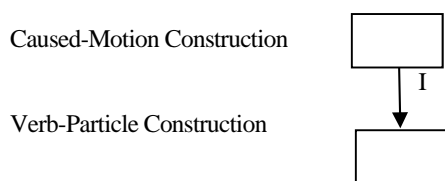


図2

さらに、前節に記したように英語の動詞・不変化詞

構文に関しては、具体的な物の場所の移動、すなわち、位置変化から結果を意味する状態変化を言語化するようになる段階がある。CHILDESを調べた限りでは、その逆はない。つまり、当該構文の意味は位置変化から状態変化へと獲得される。構文文法論の提示する継承リンクのなかでも比喩的拡張リンク (Metaphorical extension link: I_M) によって双方の関係を捉えることができる。その関係を示したものが図3である。尚、本論文における継承リンクの表記法は、異なる構文間と同一の構文間との図式を分けるため、前者の関係については縦で、後者の関係は横で示している。

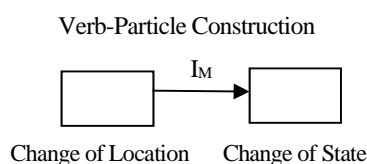


図3

Lakoff and Johnson (1980), Lakoff (1990) の提案する CHAGE OF STATE IS CHANGE OF LOCATION (状態変化は位置変化である) という概念メタファーに基づき両者の関係を捉えることができる。

4. まとめ

以上の結果から、こどもは初めから文法体系のなかに存在する動詞不変化詞構文を獲得するのではなく、位置変化を表す使役移動構文を継承して動詞不変化詞構文を獲得し、さらに、位置変化から状態変化を表す動詞不変化詞構文へと獲得されるという結論が導かれる。

謝辞

本稿執筆にあたりまして、有益な御助言、御意見を賜りました査読委員の先生方に、心より感謝申し上げます。また、本研究は、科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究 (課題番号26580088) の助成を受けて実施致しました。ここに感謝の意を記します。

参考文献

- [1] Bolinger, Dwight (1971). *The Phrasal Verb in English*. Harvard: Harvard University Press.
- [2] Goldberg, A. E. (1995). *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.

- [3] Goldberg, A. E. (2006). *Constructions at work: The nature of generalization in language*. Oxford: Oxford University Press.
- [4] Honda, Akiko. (2017). こどもの発話における意味と形式の対応関係—英語の動詞不変化詞構文を対象として—“The Relation Between Meaning and Form in Young Children’s Utterances: A Study of Verb-Particle Constructions in English.” *JELS*, 34, 30-35.
- [5] Lakoff, George, and Mark Johnson. (1980). *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- [6] Lakoff, George (1990). “The Invariance Hypothesis: Is Abstract Reason Based on Image Schemas?” *Cognitive Linguistics* 1. 39-74.
- [7] MacWhinney, Brian (2000). *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*. 3rd ed. Vol. 2. The Database. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- [8] Miyata, Akiko. (2004). *Focalization in causal relations: A study of resultative and related constructions in English*. Ph. D. dissertation. University of Tsukuba.
- [9] Tenny, Carol (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- [10] Visser, Frederik Theodoor (1963) *A Historical Syntax of the English Language*, Part 1, *Syntactical Units with One Verb*. Leiden: E. J. Brill.